

幼児の健康保育 (十三)

お茶の水女子大学助教授
愛育研究所員 平井信義

十月の母の講座には何を話していただきましょうか？

一年を通じて十月は、子供たちにとつて、最もよい月です。食欲は増し太つて来る、天気がよいので戸外で思う存分あそべる、病気が少い——本当に十月は小児科医の一番暇なときなのです。このよい季節にぐづぐづしている、冬という悪魔の季節に、子供たちはいろいろな病氣のお見舞を受けなくてはならないでしょう。

薄着にと心掛けていますか？ 今から着せ込んで、冬に着せるものがない、という様なことがない様に。

お日様の下で心ゆくばかり紫外線を浴びていますか？ 冬は日光浴が出来にくい時です。今からビタミンDの蓄えをしておきましょう。

栄養に心掛けていますか？ 必要な栄養素を総て充分に身につけておくことは、病気を防ぐには非常に役立ちます。あめなどを嘗めさせて食欲不振を招かぬ様、偏食を癒して何でも食べる様に。

予防注射はすんでいますか？ 百日咳、ジフテリア、結核などに対して。之らは近所に流行してからではもう遅い。予防注射が終えてから免疫が出来るまでに二カ月もかかるのですから、未だすんでいない方は今すぐにする様に。

扱て、今日のお話は「新しい育児のねらい」という題にしましたが、特別耳新しいことではないかも知れません。というのはいくらまで私が断片的にいく度か申上げて来たことなのですか……。

お母様の中に、御自身を、或いはお子さんが「丈夫なので医者にかゝつたことがない」と仰しやる方はありませんか？ 「医者にかかつたことがない」という形容は、本当に丈夫の印しで、心からお祝いしなければならぬかも知れません。然しそれをきく私は悲しいのです。「何？ 悲しいつて？」

病人がいなくなつたら食いつばぐれるのを、お前は悲しんでいるのだね」と医者の方にこう仰しやるかも知れません。然

しそうではないのです。私は、医者の職業を「病氣を診るもの癒すもの」と考えていることが悲しいのです。

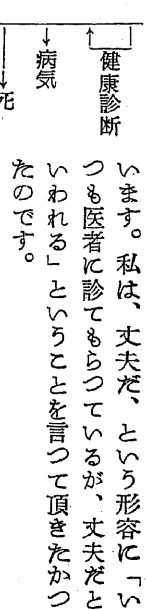
「ではお前は病氣を診たり・癒したりしないのか? と問
い返す方があるでしょう。勿論、私は現在、病人を診たり、
癒したりしています。然し私は一日も早くこの仕事をやめたい
のです。「どうして?」——それは病氣が嫌いだからであり
ます。一日も早く、世の中から病氣がなくなつて欲しいと、
心から願つてゐるからであります。

その第一歩として私は「病氣を癒す医者」を一日も早く廢
めて、「病氣にかけない医者」になりたいのです。健康な方々
に注意を与えて、病氣から護る工夫をし合うことに尽したい
のです。或いは素人では氣付かれない極く初期の病氣を見付
けて、一寸した注意だけで癒したいのです。そうすれば誰も
が病氣にならずに済みます。之を予防医学と呼んでゐます。

家族、殊に子供が病氣になつたときのことを考えてごらん
なさい。その心配、時間の浪費、そして経済の失調——私共
貧しい俸給生活者に、病氣は全く「ギョ!」であります。子
供の病氣くらい辛いものはありません。之は医者であるおや
じも同感であります。

病氣にかけない工夫をする、或いは病氣を極く初期で發見
する——之が健康診断であります。病氣にかゝる前に、打つ
ておく手が健康診断なのです。

そこで皆さんは、初めに私が「医者にかゝつたことがない
程丈夫」という言葉を悲しんだ理由が、お分りになつたと思



私共は現在、病人も診てゐます。然し仕
事の半分は健康相談に使つてゐます。アメ
リカでは、全部の小児科医の傾向が、六〇%は健康相談で
す。医者が往診に行く——それは注射薬の一杯詰つたカバン
を下げていくのではないのです。健康診断のためなのです。
ですから、アメリカの子供の死亡率は乳児は日本の半分、幼
児は九分の一であります。

ところが日本の医者の大部分は病氣を癒すことに専念して
います。むしろ予防医学のことを忘れかけてゐます。今日は
いゝ話をきいたから、といつてお母様が、近所の医者につれ
ていつてごらんなさい。「病氣でないのに何しに来た」と叱
られたという話を先日ききました。之は本当に残念なこと
です。

もし病人がいなくなつたら——と苦勞性のお母様は仰しや
るかも知れませんが、——医者は食いはぐれてしまはないか、
と。ご心配ありがとうございます。が、そのご心配はご無用
です。第一人間の生理について、まだまだ分らないことだら
け、むしろ神秘とさえいえる程なのです。又、本態の判らな
い病氣、癒せない様な病氣も沢山あるのです。予防のできる

様な病氣にかけて使うお金をそちらの方に廻してもらえば、私どもは、人間の生体をつかむ深い研究が出来るのですし、或いは「不老不死」之妙薬などが發明できるかも知れませぬ。本当に楽しみなことです。然し病人が続々来て、病氣を癒す仕事に追われていたのでは、この楽しみを味わうことが出来ないで本当に残念なのです。

話が横道へそれたが、今、健康かどうかをどうして決めるか？ こゝに一つの例を述べてみましょう。三才八ヶ月の可愛い女の子でした。両親も丈夫、その子も今まで「医者にかかったことのない」程丈夫な、健康一家であつたのです。ところが、近頃その子がどうも元気がない、家の中にいたがる——というので診察に来たのです。私の前に坐らせてみると、栄養のかなりよい、日焼した子供です。然し、少し呼吸が早い。早速聴診器をあてゝみると、確かに呼吸音が粗い。直ちにレントゲン——普通は必ずツベルクリンをして陽性だとレントゲンということになるのですが——をとつてみると驚いた!! 両肺全部が粟粒を播いた様なのです。目をこすつて見直してもあるのです。粟粒結核だつたのです。勿論入院しました。体温を測るが平熱、食慾も非常に旺盛です。之が病氣とは思えない程です。

結核菌が体に入つてこの様な粟粒結核になる迄には少くも半年位はかゝります。その間にツベルクリン反応がしてあれば、陽転を知ることが出来たでしょう。レントゲンをとつてあれば肺門結核で止めておくことが出来たでしょう。或いは

B・C・Gの注射がしてあれば、結核菌をうけても発病しなくてすんだかも知れません。

ところがその一家の不幸はそれだけではありませんでした。子供の感染源がどこか？ どこから結核菌をもらつたのか？ 一家の健康診断をしたところ、父親が空洞を持つていたのです。柔道でもやりそうな立派な体格ですが、既に空洞があつて、それが最近活動を始めているという状態にあつたのです。

以上の例から、見かけの健康がいかに当てにならないか。殊に結核の様な慢性の経過を辿る病氣が、いつの間にか体を蝕んでいくか気付いたときはもう遅い、——こうした悲劇に日常非常に多く接して、本当に残念でならないのであります。

お母様方が健康だ、と思つていても、ビタミンAやBが不足であつたり、検便してみると蛔虫卵が沢山あつたり、トラホームが始まつていたり、……。もしビタミンAが不足しつづけたらどうなるか、Bが不足していたらどうなるか、どなたもお答え下さると思ひます。

以上お話しただけで、私どもの努力してゐる予防医学について理解していただけたと思ひます。乳児なら月一回、幼児なら二、三ヶ月に一回は、必ず健康相談をうけて欲しい。保健所がだんだんその相談に応ずる中心となりましょう。開業医の方々も協力して下さいましょう。然し予防医学を充実させる根源は、お母様たちの声なのであります。ふだん元氣だといひ……こうした無精は致しませんまい。「転ばぬ先の杖」

私共医者はこの杖になりたいのです。

からだと同じ様に、こゝろにも予防医学が必要であり、之が最近精神衛生の大きな仕事になつて来たことは、本當に喜ばしいことであります。

子供のこゝろ、特に社会に對するこゝろの態度は、ゆがみ易いもので「泣き易い」「云うことをきかない」「わがまゝである」「甘えて困る」——こうしたお母様を困らせる問題は、毎日々々家庭生活の中で繰返され、お母様は恐らく終日小言をいつている状態ではないかと想像します。

「何々してはいけない」「ちやんと返事をなさい」「どうことをききなさい」「押入ですよ」「お巡りさんですよ、お医者さんですよ、屑屋さんですよ(三者はいつも同類項)」——そして最後にはビシヤリ。まことに殺伐な家庭であります。

然し落付いて考えてみましょう。「母親を困らせる子供」はどこから作られたのか? ということを。そうすれば、お母様方はどなたも冷静になる、或いは冷水をかけられた様に感ずるかも知れません。困つた子供に誰がしたのか? ——それは家庭であります。母であり、父であり、祖父母です。子供は發達の糧を家庭からとつてゐるのです。幼稚園でじつと子供の様子をみてゐると、家庭でお母様はあんなこととしていられるな、お父様はこんなことをしていられるな、と想像できるのであります。子供は家庭の鏡で、みなここに映つてゐるのであります。

しかもその鏡の映像は、すぐにはつきりと映るものではありません。極く幼いときからの生活が滲み出ているといつた方がよいでしょう。私は今、母親を困らせる子供の予防は、「乳児期から」ということを考えています。今七、八ヶ月の赤ちゃん一組の家族があつて、こういう性質のおばあさん、お母さん、お父さんがいて、こんな扱い方をしている——どういふ場合、その子が三、四才になつたときに、どんなこゝろの態度を持つか、大体見当がつく程です。

お誕生の頃に、極度の食慾不振で、鼻から管を入れて栄養をとつていた子供、之は母親が子供に泣かれるとお乳を与えていた、それと共に、夫婦の中が円満でない、祖母がいて育児に口を出す——この子供が五つになつたとき、既に母親の云うことを全くきかない子供、気に入らないと母親の頬をビシヤビシヤと打つという子供となつて、相談に来られたのです。この子が、このまゝの環境で見童期になり、青年期になつたら……。

子供のこゝろの態度にゆがみを持たせないためには、乳児期より、家庭の誰もが絶えずこゝろを磨く努力を惜しまないことゝ、子供を正しく取扱うこと——をしなければなりません。が、同時に、子供のこゝろを研究している研究者に、一寸した取扱ひについても相談する——こゝろの健康相談とでも申しましょうか。私どもは、今、この努力を熱心に行つていまして、幼いときの小さな歪みほど、癒すのは簡単です。之が歪んだまゝ大きくなると、極端な神経症や不良が出来上るので

